
エクシリア 転生者のいる世界

暁の魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エクシリア 転生者のいる世界

【Nコード】

N0777X

【作者名】

暁の魔

【あらすじ】

テンプレのように、神によって転生した主人公。エクシリアの世界で、新たな人生を歩んでいく。転生最強系ですので、苦手な方や嫌いな方は見ないことをお勧めします。エクシリアはもちろん、他のテイルズ作品も一部ネタバレがあるのでご注意ください。それとなぜか短編として投稿していたので、再度編集して投稿しました。

第一話 始まり

突然だが、俺は神に出会って転生させてもらった転生者だ。

頼むから痛い子だとか言わないでくれよ？ 二次創作のテンプレよろしく、神のミスとやらで死んじまったんだよ。そしたらお詫びとかでこうなった。

具体的に言えば、

- 1 大学から歩いて帰宅
- 2 気が付いたら天気が曇りに
- 3 そして落ちてくる閃光Ⅱ雷
- 4 ゴロゴロガッシャーン
- 5 神様「間違えて殺しちゃった」 転生させてあげるから許して？」

- 6 転生先を教えてもらい、とある物を貰う約束して意識が消える
- 7 男の人（たぶん父親）の腕の中
という経緯だ。

今で分かると思うが、やはり赤ん坊からリスタートだった。しばらくの間、とても恥ずかしい思いをした。

しかしあの神とやら、人一人殺しといて態度軽すぎるだろ。謝罪の一つもなかったし。

とはいえ母親も父親も、というか親戚は全員既に死んでるんだけどさ。不幸な事故で。

……まさかそれもあの神とやらの所為か？

あの時以来、俺の頭からは神が全知全能だとかいう説は消え失せたよ。だってあれじゃ、『神』じゃなくて『神（笑）』だもの。ミスしてる時点で全知全能じゃねえし。

ちなみにこの世界は、【テイルズ オブ エクシリア】の世界だ。
テイルズシリーズは俺の大好きなゲームの一つなんだけど、これは
特に面白かった。だからこの世界に来て本当によい。

さて、転生等の話はとりあえずこれまでにしておこう。

俺は今、ラ・シュガルの首都であるイル・ファンにいる。物語はこ
こから始まるから、5年程前からここに住んでるってわけ。

「ゼニス！ 急患だよ！」

「わかった、今行く」

あ、ゼニスってのは俺の名前ね？ んでもって俺を呼んだのが、

「今日はなんだか患者の数が多いな。そう思わないか？ ジュード」

「うん、僕もそう思う。 たった今診察したエデさんも同じで、精霊
術の失敗で怪我をする人が多いんだけど……みんな、^{ゲート}靈力野も問題
なかったし」

主人公の一人、ジュード・マティスだ。

今の俺はイル・ファンのタリム医学校で働いている。回復の精霊術
が使えるというのと、ジュードがここにいるからという理由だ。主
人公とは仲良くなっていたいからな。

それで今、俺の上司であるハウス教授に頼まれて患者を診ていろっ
てわけだ。

さて、それでは俺のちょっとした自己紹介でもしよう。

俺の名前は先ほども言ったように、ゼニスだ。ラストネームはヴェ

ルクスト。だけど諸事情によりフルネームではなく、ファーストネームだけ使っている。孤児だからという嘘の理由を使えば、ラストネームが無いことを気に掛ける人はいない。孤児にラストネームが無いのは、珍しくないからな。

そして25歳の独身。彼女はいたことあるけど、今はいない。

……寂しくなんてないぞこのヤロー。

両親はすでに他界している。20年前にあった戦争、ファイザバード会戦に参戦していて、突然起きた大津波によって流されたらしい。その津波の規模の大きさから、「あれでは助からない」と、誰もが俺に言ってきた。当時5歳の俺に言うのは早すぎるだろ。精神年齢はもう20だったけどさ。

それから今までの20年間は、色々なことをした。そこはいずれ分かる時が来るので、今は秘密。というか言ったらネタバレになるの
で言わない。

それと転生させられたとき、俺は『ある物』を貰った。転生に関係した願いを一つだけ叶えると言ったので、貰った。

何を貰ったのかって？ 【エクスフィア】だ。これはTOSに出てきた物質で、潜在的身体能力を発揮させられる代物だ。TOSでは【要の紋】というものが無ければ副作用みたいなものがあつたけど、俺が貰ったやつにその副作用はない。そんな副作用で死んだら、元も子もないしな。

ちなみに、既に装着済みである。

ふふふ、修行してただでさえ強い俺の力はこれでさらに強くなって……ふふふふふふ。

.....。

「……あ、すまない。トリップしてた。ん？ 原作はどうするのかって？ ……ほとんど覚えとらんわ！ でも確実にブレイクするだろうな。だって本来なら、俺はいない存在なんだし。」

「ジュード先生、それとゼニス先生。今の患者さんで最後です」

そう言つて診察室に入つて来たのは、看護師であるプランだ。年齢は知らないけど、俺は呼び捨てにしている。

「そうか……丁度、急患が多いかと、ジュードと愚痴をこぼしていたとこだよ。教授に、今日は予定の患者しか来ないからって言われてたのにさ」

「教授も、いい加減ですわね。急な患者が来ないわけないのに。信用しちやったお二人が悪いですわ」

「教授が精霊術で扱えるマナの量なら、一人診るのも十人も一緒にんでしょ」

「^{ゲート}霊力野ばっかり発達しちゃって、普通の感覚じゃないんですよ」

俺らがそう言い合っていると、突然扉が開かれた。ジュードと同じ医学生だ。

「あ、あの！ ハウス先生見ませんでしたか？」

「そういえば、もう帰ってきていてもいいはずですけど……何かあったんですか？」

ジュードが腕を組んで考え、質問してきた医学生に聞き返す。

「先生の研究がハオ賞に選ばれたと連絡が！」

「ええっ！？ 研究者最高の賞じゃないですか！」

ハオ賞。それかつての偉人であるハオの名前を使った、ジュードの言う通り最高の賞だ。ジュードにとっては憧れの先生がそれに選ばれたというのだから、驚きも多いだろう。

「それで先方から早く連絡をしてほしいと。でも、先生ったら行き先を残してなくて」

「なら、僕が迎えに行つてきます。行き先は聞いてますから」

ジュードはそう言いながら、着替えるためにカーテンの奥へ行つた。……もう出てきた。いくらなんでも早すぎだろ。

「いつも雑用みたいな事ばかりさせてすみません」

「いえ。それじゃ、行つてきますね。……そうだ、ゼニスも暇ですよ？ 一緒に行かない？」

「……………は？」

待て。何でそうなる。あそこは原作開始の場所だと言っても過言ではない。しかもあそこにはアイツがいるし、原作通りだとジュードはアイツと会う。つまり俺が付いて行ったら、俺も必然的にアイツに会うわけだ。それはなんとしても避けなくては。

「いや、俺は待ってるよ。……行くのが面倒だ」

ちなみにこれ、半分本音である。あそこまで行くのはめんどい。

「面倒って、ゼニスは教授の第一助手でしょ？ ゼニスが行かなくて他の誰が行くのさ」

そう。俺は何故かあの教授に気に入られ、第一助手となってしまうのだ。本来ならジュードが第一助手候補だったのに……。

「お前でもいいだろ？ 第二助手候補のジュード君が行けばさ」

「あのね……とにかく行くから、速く着替えて！」

「ちょ、おい、押すな！」

後ろからグイグイと、さつきジュードが着替えた場所まで押された。見かけによらず、腕力が強い。

そして渋々と着替える俺。ここにも俺の私服があるからな。

「これじゃ、どちらが年上か分かりませんわよ？ ゼニス先生？ 早くお嫁さんを貰って、落ち着いた方が良いんじゃないありません？」

プランが笑いながら言うてくるが、無視。

俺にだって恋人候補、一応いるんだからな！ 告ってくるいい女、

いるんだからな！……二人ほど。
でもあいつらは……いい女なんだが……恋人としては……はあ。

「はあ、着替えたぞ。んじゃ行くか」

「うん、行こう」

プランたちに手を振って、診察室から出る。出る瞬間にプランが溜息を吐いてたけど……どうかしたのか？

そして数分後。俺たちはハウス教授が向かった、ラフォート研究所の目の前にいる。

入り口には兵士が二人おり、中に入れてはもらえなさそうだ。

案の定ジュードが入り口に近づくと、一人の兵士が前へ一歩進んだ。

「この時間はもう立ち入り禁止だよ」

「迎えで来たんですけど……タリム医学校のハウス教授です」

「ハウス……ハウス……。その先生なら、もう帰ったはずだ」

もう一人の兵士がそう言う。

するとジュードは、兵士が持っている物に指を差す。

「それ出所記録ですか？」

その言葉を肯定するかのように、兵士はジュードにそれを渡した。ジュードはそこに書かれている教授の名前と、自分が持っている単位申請書に掛かれた教授のサインを見比べている。

「あれ……?」

小さな声で疑問を口にするが、俺は聞こえないふりをした。というかさつきから俺ってば会話に入ってたねえ。

「納得してくれたかい?」

兵士にはさっきの言葉が聞こえていなかったようだ。そうでなければ、そんなことは聞かない。

ジュードは「どうしてもダメですか?」と聞くが、許されるわけもない。規則を守るのが兵士の仕事だと言われ、諦めた。

「……ゼニス、どうしよう?」

「どうしようって言われてもな……あの人たちも仕事だからしょうがないだろ」

「そうなんだよね……」

会話をしながら歩いていると、突然周りの光が消えた。

「何だろう……やっぱり精霊がおかしい?」

この街の明かりは精霊術を使った光だ。なのに消えたということは、ジュードの言う通り、精霊に何かおかしいことが起きているということだ。

そして、突風が吹いた。

その突然の風は、ジュードが手に持っていた申請書を吹き飛ばしてしまい、上空に消えて行った。

それを呆けながら見ていると、湖の不思議な光景が視界に入った。青い魔法陣が水の上に浮かび、その上を綺麗な女性が歩いている。

……もう一人の主人公、ミラ。ミラ＝マクスウェルだ。

気が付けば、ジュードがいなくなっていた。あいつもこの光景と一緒に見てたのに、どこに行ったのか……。

……あ、いた。ミラを追っかけてる。……んでもって水の大精霊ウンディーネに、水の球に閉じ込められやがった。大方、静かにしてほしいと言われたのに、何か質問でもしたのだろう。

あああああああ~~~~~!!!! ミラが研究所の中に侵入しようとしている！ これ、止めた方が良いのかねえ？

というか今のこの態勢、結構つらいんだけど。ミラたちがいるのが俺のいる場所の真下に位置する場所でさ、蝙蝠みたいにぶら下がってるわけよ。冗談抜きでキツイ。足の指を食い込ませてるんだけど、それはきつくない。ぶら下がっているということは逆さまになっているという事。だから頭に血が上って……この場合は下ってか？ とにかく気持ち悪い。

あ、吐き気と戦ってたらジュードもいねえ。いつの間にか水の魔法陣も消えてるし。ということはあるいつも研究所の中に入ったな？ はあ、ジュードもこれで侵入者か。

………あいつらが出てくるまでに、武器の準備をしておくか。あいつらが研究所から出てきた時、それからが本当の始まりだ。間違いない。

………そう、テイルズ物語の始まりだ。

第二話 二つの出会い（前書き）

何故かこっちの方がスラスラと書けるといふ不思議。もう一つの方もちゃんと書きたいのに……

誤字・脱字がありましたら、報告お願いします。感想もお待ちしております。

第二話 二つの出会い

ジュードとミラが研究所に侵入してしまってから、何分か経過した。大して経ってはいないと思う。

俺は自宅に戻り、愛用の二つの剣を持ち出した。イル・ファンに来てからも鍛錬を欠かさず行い、町の外に出て魔物を狩ることも多々あったので、俺の腕は衰えていないはずだ。この剣は10年間使っているが、未だに刃毀れがない素晴らしい剣だ。ま、この剣の出所を聞けばそれも納得だけど。

剣を持った俺は、急いで研究所の近くに戻る。するとタイミングよく、水の中から二人の人影が見えた。ジュードとミラだ。明らかに泳げないミラを、ジュードが担ぎながら泳いでいる。器用なやつだな……。

「ほらジュード、掴まれ」

「あ、ゼニス……ありがとう」

浮かんできたジュードに手を伸ばして助け出す。助けなくても大丈夫だっただろうけど、一人抱えて水から出るのは大変だろう。

……ジュードのついでにミラも引き上げることにしよう。

「ほれ、そっちのあんたも」

「む、誰だか知らないがすまない。助かる」

「ミラ、泳げないんだね。大丈夫？」

「こほつ。ウンディーネのようにはいかないものだな」

「やっぱり、四大精霊の力が消えたんだ……ねえ、これからどうするの？ 精霊の力が無いと、あの装置はきっと壊せないよ」

「あいつらの力、か……二・アケリアに戻れば、あるいは……世話かけたな、ジュード。ありがとう。君は家に帰るといい」

「あ……」

ジュードの質問には答えず、自己完結してから礼を言ってミラは立ち去った。

……俺、またしても会話に参加してない。

「……ジュード。四大精霊やら装置とかいろんな単語が出てきたが……一体何なんだ？」

その答えは知っているが、あえて知らないふりをする。

「あ、それは……」

ジュードは答えようかどうか迷ったみたいだが、事の顛末を教えてくれた。

教授が死んでしまったことや、それを見た直後に赤い服を着た少女に殺されかけたこと。そしてミラがその少女から助けてくれたこと。等々だ。

しっかし赤い服を着た少女って……間違いなくアイツだよな？ 行かなくてよかった。あいつとは敵対しているわけではないが、あれはある意味敵対関係よりも面倒だ。

話を聞き終わり、階段を上る。すると目の前に、兵士と対峙しているミラがいた。

「ミラ！」

「不用意だな。ジュード、無関係を装えばよいものを」

ミラが驚いてそう言うが、全くもってその通りだ。

「貴様らも仲間か！」

ほれ、兵士さんに仲間認定されちゃったよ。つか貴様らって、貴様”ら”って、俺もですか？ すんごいとばっちりを食ったんだけど。

そしてミラが兵士に向かって斬りつけるが、大振りすぎて簡単に避けられる。

「ちょ！ ミラ、剣使ったことないの？」

「うむ。今までは四大の力に頼って振っていたからな。あいつらの力がないと、こうも違うとは……」

その言葉を聞き、ジュードが俯く。

「覚悟しろ！」

「もう!」

どうやら覚悟は決まっただけ、ジュードは兵士に立ち向かっていく。

……『もう!』と言いたいののはこっちだ。

兵士の装備品は槍と盾。対するジュードは拳で、ミラは不器用な剣。ジュードがもう少し成長すれば簡単に勝てるだろうが、少し苦戦している。鎧相手に拳はきついよなあ。

「はあ……恨みはないんだけど、悪いね。刻印十字!」

俺は三人の間に入っていく、持ってきていた双剣を使ってエックス状に斬りつける。刻印十字斬という技だ。

俺の攻撃は見事に命中し、兵士を鎧ごと切り裂いた。切り裂かれた兵士は倒れたので、死なない内に精霊術で回復させておく。

「はあ、はあ。何やってるんだろう、僕は……」

「重ね重ねすまない。ジュード、助かった。それに君も」

「どういたしまして。あと俺の名前はゼニスだ。君、じゃない」

「そうか、私はミラ。ミラ＝マクスウェルだ」

こんな簡単に名前を教えてもいいのだろうか。自分から精霊の主だと名乗るとは……まあ俺は知らない振りをするのだが。

「精霊の主と同じ名前とは珍しいな」

「同じ名前というより、本人だからな」

折角気を遣ってやったのに……。

「それよりもミラ、とにかく急いでイル・ファンを離れた方が良いと思うよ」

「そうしよう。ではな」

素っ気なくミラは出口に行こうとするが、ジュードがそこに注意する。

「街の入り口は、警備員がチェックしていることが多いんだ。海停の方が安全だと思うよ」

「む、そうか」

ミラは返事をするも、周囲を見てから首を傾げる。

「……海停、知らないんだね。こっち」

出た、ジュードのお節介。これはジュードの良い所なんだけど、これが原因で危険へ足をつ込むことになるんだよね……これから。

「すまない、世話になる」

「ううん。助けてもらったお礼。海停まで送るよ。海停はここから街のちょうど反対側なんだ。まず中央広場へ向かおう」

二人はそう言って歩き出すが、またしても俺は蚊帳の外。泣いても

いいっすかね？ 泣かないけど。
取り敢えず二人についていくことにした。

「そう言えばゼニス、何で剣を持ってるの？ さっきまで持ってなかったのに」

「お前がミラを追って行ったのは見えててな。なぐんか嫌な予感があったから、家に帰って持ってきたんだ。その予感は見事的中したみたいだけだな」

「ふむ。だがそのおかげで私とジュードは助かったのだ。改めて礼を言おう、ゼニス」

「僕からもありがとう、ゼニス」

「どういたしまして。にしても精霊の主ねえ。そうは見えないけど、どうせ本当なんだろうな……」

「おや、君は信じるのか？ ジュードは最初、疑っていたのだが」

「さっきクシャミして、『イフリートがいれば』って言ってたからな。服を乾かすだけで火の大精霊を使役するなんて言ってるのを聞けば、信じるしかないだろ。俺が助けた時も、ウンディーネがどうのこうのって言ってたし」

それに加えて、俺の場合は知識があるしな。ほとんど忘れたけど、重要な部分はさすがに忘れていない。

それからもしばらく走り、海停へと到着した。状況からして、船ももう少しで出港するようだ。

そして海停を歩いて船へ行こうとした時、突然怒鳴られた。

「その三人、待て！」

「え……何！？」

またしても兵士だ。ついか何で俺も？ 俺の横で驚いているジュードはまだ分かる。研究所に侵入してしまったんだから。ミラもそれに同じ。でも俺は何で？ さっきの兵士を倒したから？

「先生？ タリム医学校のジュード先生？ それにゼニス先生まで……」

「あなた……エデさん？ 何がどうなってるんですか？」

向かってきた兵士の一人は、今日俺たちが診察したエデさんだった。唯一ヘルムを被ってないのですぐにわかった。

それと遠回しに何こちを見てんだ野次馬共。見世物じゃねえぞ。

「先生たちが要逮捕者だなんて……ジュード・マティス、ゼニス。逮捕状が出ている。そっちの女もだ。軍特法により応戦許可も出ている。抵抗しないでほしい」

Oh Shit！ 俺もかよ！

「ま、待つてください！ た、確かに迷惑をかけるようなことはしたけど、それだけで重罪だなんて……！」

兵士はジュードのその言葉には耳を貸さず、武器を構えてくる。でも今回の一番の被害者って俺じゃね？ いやさ、物語に介入するに

あたつてこうなることは予測ついていたから口には出さないよ。でも二人を助けただけで重罪つて……とはいえ、俺の立場的には重罪だけどな。

俺の立場つて何なのかつて？ 今は秘密。いずれ分かると思う。

「問答無用ということのようだ」

「エデさんっ！」

「悪いが。それが俺の仕事だ」

仕事と私事はしっかりと分別する、ということか。

俺には分からないな……俺、本当の仕事をサボつてイル・ファンで医者してたもの。本当の仕事が何かつて？ これも秘密。

「ジュード、ゼニス。私は捕まるわけにはいかない。すまないが抵抗するぞ」

「……抵抗意思を確認。応戦しろ！」

エデさんの言葉で、彼の部下がファイアボールを放った。ミラとジュードはそれを避け、その後ろにいた俺も避ける。

その光景を目にして、一般市民はどんどん逃げて行った。

「さらばだジュードとゼニス。本当に迷惑をかけた」

船の汽笛が聞こえ、ミラがそちらへ走っていく。船が出港していくのが見えたらしい。もう行ってしまった。

「さあ、先生。抵抗したら、その分罪は重くなりますよ」

「僕は、僕はただ……」

俺は抵抗する意思なしと見たのか、俺ではなくジュードに詰め寄る兵士たち。だがあと少して捕まるというところで、横から乱入者が現れた。

その乱入者は兵士を殴り倒していき、言葉を放った。

「軍はお硬いねえ。女と子どもとプラス1相手に大人げないったら」

……おい、プラス1って俺のことか？

「あ、あなたは……？」

「おっと。話はあとな。連れの美人が行っちまうよ？」

「でも、僕は……！」

「軍に逮捕状が出て、特法まで適用されている。つまり俺らはSランク犯罪人扱いだ。このままだと極刑だぞ、ジュード」

「そっちの兄ちゃんの言う通りだ」

「そんな！」

今日は驚いてばっかだなジュード君。というかこれ以上の厄日はそうそうないだろう。

というか俺も今日は厄日か？ 今を見て周りの兵士が集まって来たし。

俺も極刑は嫌なので、二人と共に逃げる。

先ほど乱入してきた男がジュードの腰を掴み、船に向かって勢いよく跳躍。あの脚力は素直に凄いと思う。俺も足に自信はあるが、ジャンプだけは鍛えてないのでそんなにない。今後から訓練するとして。

それでどうやって船に乗り込むのかだが……よし、こうするか。

とある方法で俺が船に着くと、さっきの乱入者が自己紹介をしていた。やはりというか、彼の名前はアルヴィンというらしい。

「こっちはミラ。それでこっちがゼニス」

「今紹介されたゼニスだ。よろしく、アルヴィン」

「よろしくな。そして……」

アルヴィンはジュードの肩に手を乗せ、優しくこう言った。

「がんばったな」

俯きながらも、ジュードは頷く。

ただの一般人がこんな目に合ったのだから、本当に頑張ったと俺も思う。

そしてその後の俺たちを待っていたのが、船長による長い尋問だっ

た。ま、犯罪者かもしれない輩を、自分の船に乗せたくないよな。特にミラは身分を示す物がないので、かなり時間がかかった。アルヴィンは愚痴を言うが、俺はその辺納得している。

そんな中、一人黄昏ている人物がいる。ジュードだ。

「ア・ジュール行きだなんて……外国だよ……」

「見ろよ。イル・ファンの霊勢が終わるぞ」

アルヴィンそう言った直後、夜のようにだった空は瞬く間に青空へ変わった。

「にしても、医学生と医者だったとはね。ちょっと驚いたよ」

俺が医者だったら驚くのか？ それ失礼じゃね？

「ねえ、聞いていい？ どうして助けてくれたの？ あの状況じゃ、普通助けないよ」

「金になるから」

ジュードの問いに、アルヴィンは即答する。ここまで早い返答も珍しい。

「私たちを助けることが、なぜそうなるのだ？」

「あんたらみたいなのが軍に追われてるってことは、相当やばい境遇だ。そいつを助けたとなりゃ、金をせびれるだろ？」

「でも、僕、お金ほとんど持ってないよ」

「生憎、私もだ」

「そして俺もそうだ。九割方俺ん家にある」

「……もう押収されてるかもしれないけど。でもまあそれはイル・フアンで稼いだ金だ。俺の実家には、もっとあるけどな。100万以上。」

「マジか……なら値打ちもんでもありや、それで引き受けるぜ？」

「ないよ。あんな状況だったんだ」

「高く取引されそうなものなどないだろうな」

「俺はこの剣くらいだが……これは駄目だ。とても手放せない」

これ以上に大切な物はないからな。命とかは別として。

「ねえ、アルヴィンって何してる人？ 軍人みたいだけど……ちょっと違う感じだしさ」

「ジュード。今の取引の仕方からして、アルヴィンはおそらく傭兵だ」

「お、ゼニス正解。金は頂くが、人助けをするすばらしい仕事」

「ふむ。それは感心なことだ」

ミラは感心するが……そうすばらしいものじゃないと思うけどな。金次第で敵にも仲間にもなるわけだし。ああ、アルヴィンを否定してるわけじゃないからな？

「にしても、ゼニスは俺が何をしているのか、よくわかったな」

「そりゃ、俺も医者の前は傭兵だったからな」

「えっ！？　そうなの！？」

「ああ。傭兵の時に得た医療知識を使って、医者になったんだ。場合によっちゃ、こっちの方が儲かるし。だから剣も持ってるんだよ。当時使ってたからな」

これは半分嘘で半分本当だ。

「どうりでな……しかし、しゃあないか。ア・ジュールで仕事でも探すか」

「すまなかったな」

金がないことミラが謝り、しばらく沈黙が続く。

そこで俺はもう喋ることはない判断し、勝手に物置部屋を借りて寝ることにした。最近は忙しくてあまり寝れなかったから、船から降りるまで寝ようと思ったからだ。

——船を降りる少し前のチャット——

出演者：ゼニス・ジュード・ミラ・アルヴィン

ジ「そういえばさ、ゼニスはどうやって乗船したの？」

ミ「ふむ、それは私も気になっていた。ジュードとアルヴィンは飛び乗ったのを見たが、ゼニスは気が付いたら既にいたからな」

ゼ「俺はアルヴィンほどジャンプには自信がないんでね、違う方法を使っただよ」

ア「違う方法？　どんなだ？」

ゼ「なに、ただ水上を走っただけだ」

ア「……すまん。もう一度言ってくれるか？　どこをどうしたって？」

ゼ「水上を、海の上を走って船に追いついた。ただそれだけだ。海からジャンプした方が近かったからな。だがこれからはこういう時間のために跳躍力も上げなくては……ちょっと練習してくる。時間になったら教えてくれ」

（ゼニス退場）

ア「……なあジュード君？　彼、本当に人間？」

ジ「た、たぶん」

ミ「どうやら私は人間を見誤っていたようだ。まさかそのようなことが可能とは……」

ジ「いや、普通はできないから、そんなの」

第二話 二つの出会い（後書き）

これからも更新頑張ります。

第三話 魔物との初戦闘（前書き）

アビスのリメイクに続いてイノセンスも出るらしいですね。最近知りました。とても驚きです。

誤字・脱字等ありましたら、報告をよろしく願います。感想もお待ちしています。

第三話 魔物との初戦闘

船が海停に到着し、陸に降りたつ。俺は海があまり好きではないので、船から降りられて正直嬉しい。

背伸びをしていると、近くでジュードとアルヴィンが話を始めた。ここは外国のア・ジュールなのだが、ラ・シュガルとそんなに変わらないことを話題にしている。

確かにそれを聞くと、ここらはそんなに変わらないことに気付く。

そんなジュードだが、突然地図を見てくると言つて地図まで走つて行った。

傍から見てもわかるが、明らかに無理をしている。

「空元気、かねえ」

「気持ちを切り替えたのか。見た目ほど幼くないのだな」

「おたくが巻き込んだんだろ？ 随分と他人事だな」

「確かに世話になった。だが、あれは本人の意思だぞ？ 私は、再三帰れと言ったのに」

「は〜ん。それでおたくに当たるわけにもいかないから、あの空元気ってか。どっちにしてもオトナなこと」

そこでミラはジュードのしている地図の所へ行き、話し相手のいな

くなったアルヴィンは後ろにいた俺に話しかけてくる。

「で、ゼニスは文句言わないのか？ 話を聞く限り、おたくは完全な被害者らしいが？」

「被害者だという点は否定しない。だが嫌な予感してたし、どんな理由であれ兵士を一人倒しちまってるしな。文句は言わねえよ。これは俺の行動の結果が招いたことだから、自分の責任として背負っていくさ。それに人生の新たな起点だと思えばいい。そうだろう？」

実際は原作を知ってて自分から介入したんだから、文句を言うのは筋違いだ。ま、今行ったのも全部本当に思ってることだけど。それに、どちらにしろ俺は……いや、今はいいか。

「へえ。責任感がある上に、ポジティブな性格してんのな」

「はは、責任感は微妙だが、ポジティブなのは自覚してるよ」

会話しながら地図を見ている二人に近づくと、ミラの目指している場所はここから北だということが分かった。地図を見ていたミラの呟きが聞こえたからな。

「ふん。それで？ すぐに発つのか？」

「いや……アルヴィン、それにゼニス。傭兵というからには、戦いに自信はあるのだろうか？」

「ああ。そりゃあな」

「右に同じ」

ミラの質問にアルヴィンが肯定し、俺もそれに続く。

「私に剣の手ほどきをしてもらえないか？ 今の私は、四大の力を持たない。剣を扱えないと、この先の道は困難だ」

「四大……？ なんか、よくわかんねえけどさ。正直、俺を雇って欲しいとこだよ。でも金ないんじゃないかな……」

「無理だろうか？ ゼニスは？」

「俺は別に構わないが……いや、そうだな。お前ら、アルヴィンを雇え」

俺のこの言葉に、頭上にハテナマークを浮かばせる三人。でもま、金がないのに傭兵を雇えとか言えば、そうなるよな。

「人々の中には、自分が出来ないことを依頼する人がいる。その依頼を引き受ければ、内容によっては剣の訓練にもなる。そしてその報酬をアルヴィンに払えば、利害が一致するだろう？」

「なるほど……だが、ゼニスはそれでいいのか？」

「ああ。最近ストレスが溜まってたから、発散させようと思ってね。俺は勝手についていくだけだから、報酬は不要だ。アルヴィンもそれでいいだろう？」

「むしろ俺にはいいこと尽くしだから、大歓迎だ」

これからの方針はこれで決まった。ま、原作と同じ結果だけだな。

だが、もう一つ注意すべき点がある。それは、

「その前にアルヴィン。ミラ嬢に剣の基本だけでも教えてあげてくれないか？ 一度だけ剣を使っているのを見たが、あれではミラ嬢が死ぬ。教えている間に、俺が依頼を探しておくからさ」

「そうなのか？ まあ基本だけなら……わかった」

これも何とか解決。あのままでは、報酬を払う払わない以前の問題になる。万が一の時には俺かアルヴィン、ジュードがミラを守ればいいのだが、誰もいない時に狙われたら簡単に死ぬる。

その後五分くらいで、依頼をしようとしている女性を俺は発見した。その人の依頼内容はこの海停の先にある間道、イラート間道にある湖にいる魔物退治だった。湖の水は大切な資源なのだが、その魔物が棲み付いたせいで問題になったらしい。

報酬は現金で払うと言っていたので、早速アルヴィンたちの所へ向かった。タイミングが良かったらしく、ちょうど基本を教え終えたようだ。

「お、ゼニスか。どうだった？」

「バッチリ。この先にあるイラート間道の魔物退治だ。この近辺にはいない魔物なんだと。場所は西にある湖付近だ」

依頼内容を伝え、俺たちはすぐさまその間道へ向かう。

そして間道に入ると、目の前には複数の魔物がいた。ミラの剣の訓練にはもってこいだと思い、話しかけようとする。するとそこで、

俺を含めた全員のリアルオーブが光る。

「む、リアルオーブが光った？」

「なんだ、ジュードが持つてるのは知ってたけど、ミラ嬢も持ってたのか。……まあ、アルヴィンは俺と同じ傭兵だから、持ってもおかしくないけどな」

「お前らもリアルオーブを持ってたのか？ んじゃ、共鳴戦闘、いつてみるか！」

ジュードとミラは共鳴^{リンク}の事を知らないようだ。今の言葉を聞いて、首を傾げていたからそうだとわかる。

アルヴィンが軽くリアルオーブの説明を、つまりリアルオーブを持つ者同士で、互いに感知できることを教えた。本当に軽くしか説明してないので、二人はまだよくわかってないらしい。

それにしても共鳴^{リンク}戦闘か……。そういえば久しく使ってなかったな……。最後に使ったのは確か5、6年前だったか？ でも今は思い出に浸かるより、分かってない二人に教えるのが先だな。

「習うより慣れろ、戦って覚えるのが一番だ。ちょうど魔物もきたぞ」

「そういうことだ。リアルオーブに意識を集中しろ！」

言葉を言い終わると同時に、戦闘が始まった。

こいつらはここら一帯にいる魔物で、かなり弱い分類に入る。戦士として、並の力があれば勝てるだろう。

「魔神拳！」

ジュードの技が炸裂する。ミラと共鳴リンクを繋げていたらしく、共鳴術リンクア技が発動した。

「行くよ、ミラ！」

「了解した！」

「「絶風刃！」」

魔神拳とウィンドカッターによる共鳴術技リンクアーツ、絶風刃。エックス状の風の刃は直線に進み、魔物を切り裂いていった。

「やるじゃねーの」

「傭兵同士、俺らもやってみるか？」

互いに頷き合い、俺は魔神剣を放つ。そして発動する共鳴術技リンクアーツ。

「行くぞアルヴィン！」

「おおよ！」

「「魔神連牙斬！」」

俺、アルヴィンの順番で魔神剣を放ち、最後に同時に魔神剣を放つ。最後の一発は同時に放つただけのことはあり、衝撃波が重なって大きくなった。その三つの斬撃による衝撃波も、絶風刃と同じように魔物を切り裂く。そして、そこにいた魔物は全て倒しつくした。

「どうだった？ 共鳴^{リンク}ってのは？」

「うむ、気に入った」

「うん、一人じゃないって嬉しいね」

「ああ、いいこと言うねジュード君」

初めての共鳴^{リンク}戦闘の説明と実践を終了し、俺たちは目的地である湖へ向かう。途中でも魔物はわんさか出現したが、俺たちの敵ではなかった。

「そう言えば、ゼニス^{リンク}は剣を二つも持っているな。なぜだ？」

何回目の魔物を倒した際、ミラが突然聞いてきた。

でも特に何も考えてなかったから、理由とかないんだよな……あ、そうだ。

「本来なら秘密なんだが、特別に教えてやろう。聞いて驚け。俺は昔、剣一本の強さが百であるなら、二本の剣を持てば力がその倍の二百になることに気が付いたのだ！」

「なんだと？」

「はあ？」

「なに、その変な理由は……？」

ミラ、アルヴィン、ジュードの順番にそう言われた。どうやら信じ

られてしまったらしい。これは泣ける。

「……いや、嘘だと気付けよ。さすがにそこまでおめでたい頭はしていない」

「そう、だよな？ ふう、あせったぜ。元とはいえ同業者の頭がアレだったら俺まで誤解されちまう」

「私もおかしいと思ってはいたが、やはり嘘か。おかしくないように安心したぞ」

「よかった、ゼニスの頭の中を見ないで済んで。違う意味で聞いて驚いたよ」

お前ら酷いな。ジュードはともかく、会ったばかりのお前ら二人にそこまで言われる筋合いはねえぞ。まったく、本当に……

「あいつじゃねえんだから、んな間違いするか」

俺のこの一言で、俺を除いた男二人が固まった。

「え？ そんな間違いをする人がいるの？」

「おう、いるぞ。１７歳のな」

「１７って……優等生より年上じゃねえのよ」

一応教えるが、優等生〃ジュードな？

「それで結局、ゼニスはなんで二つも剣を持つてるの？」

「それはだな……お、ちょうどいい、またしても魔物だ。教えてやるから、ちよっと見てろ。お前らは参戦しなくてもいいから」

そう言い、出てきた二体の魔物と対峙する。

二本の剣、双剣を構えて、魔神剣の変化技を繰り出す。

「魔神剣・双牙！」

二つある剣から、それぞれ一つずつ魔神剣を放つだけの技だ。そして二つの斬撃に襲われた一体目の魔物は、あっという間に絶命した。俺はジュードたちの方を向き、

「連撃を目的とした戦闘方法、それが今の双剣スタイルだ。そしてこれが……」

そこまで言い、二つの剣の柄と柄を重ね、合体させる。

「一撃重視の両剣スタイルだ。そら、剛・魔神剣！」

力強く振り下ろすその攻撃は、ガードしていた魔物の抵抗をあっけなく崩し、両断した。

それを確認した俺は、ジュードたちの所へ戻る。

「こういう二つのスタイルで戦えるから、剣を二つ持っているという訳だ。記憶したか？」

「面白い戦い方をするのだな、ゼニスは」

「なんだか、俺と微妙に似ているな」

そうかもしれない。アルヴィンには銃と剣を合体させる、チャージ状態というものがある。チャージ状態の時には技が強力に変化するので、変化するということとは同じだな。技も被るものがあるし。

それからしばらく歩き続けると、湖が見える場所まで到着した。たしかにこの辺りにはいないはずの魔物がいる。

「さて、あれを倒せば依頼達成なんだが……これはお前らがアルヴィンに報酬を払うためだから、お前らが戦え。実戦が一番の訓練だし、危なくなったら助けてやるから」

「確かにその通りだな。行くぞ、ジュード」

「うん、わかった」

二人は意気揚々として魔物に向かっていく。アルヴィンもそれに続く。

そして俺はその後方で見守っている……わけでもなく、近くの岩場に腰掛けている。アルヴィンがいれば平気だろ。

「まあ正直、俺が戦うのがめんどくなっただけだが」

ストレス発散は一応出来たし、戦う理由もないしな。

「それが本音なの!？」

「ん? おお、もう終わったのか」

「終わったよ……ところで大丈夫、ミラ?」

「ああ、ゼニスの言う通り、実戦が一番の訓練だな」

ジュードの言葉に、大丈夫だと返すミラ。二人とも大した怪我は負ってないし、心配はしなくてもいいな、こりゃ。

「んじゃ、イラート海停にもどって報告しようぜ。ゼニスが受けたんだから、報告よろしくな」

「了解だ」

「……依頼を受けた人が最後の最後に報告するだけって、いいのかな？」

「いいんだよ、別にそれだけでも。これはミラ嬢の訓練なんだから。そして報酬はアルヴィン行き。俺が貰う訳でもないし」

ジュードは微妙に納得していなさそう。こういう所は嫌いじゃないんだが、生真面目なんだよな……あ、この場合は俺がサボったからか？ それならごめんなさい。

そしてさっきの魔物でサボった罰として、イラート海停に戻るまでの魔物は全部俺が戦う羽目になった。……ジュードめ、10歳も年上の俺になんて仕打ちだ。敬意を払え。とはいえザコなので簡単に勝てるが。

さて、速く戻って以来達成の報告をしよう。腹が減ったし、何より眠い。船の中で散々寝たはずなのになあ。

第三話 魔物との初戦闘（後書き）

剣一本の強さが百ならば、二本の剣を持てば二百。さて、これは誰の言葉でしょうね？

それとゼニスの双剣スタイルはTOSのロイド。両剣スタイルはT OGのヒューバートみたいな形です。

主人公のステータス（前書き）

感想が来ないというのは誤字・脱字がないからだと思ふべきだろうか。それとも人気がないからだと思ふべきだろうか。そこが悩みどころです。

取り敢えずサブタイどおりです。見づらいうでしたら修正します。原作開始時のステータスなので、若干のネタバレがあります。見たくない人は見ない方が良いでしょう。

ちなみにとてもハイスペックです。なんせ最強系ですから。

主人公のステータス

ゼニス	Lv	40
HP	3050	
TP	330	
物攻	2318	
物防	2204	
魔攻	2006	
魔防	1834	
腕力	625	
体力	519	
知性	452	
精神	423	
敏速	621	
器用	407	

・装備品

武器：黒い二つの剣（今は名称不明） 物攻：950 魔攻：650
 体防具：ロンスデーライトガード 物防：950 魔防：155
 頭防具：ロンスデーライトヘルム 物防：450 魔防：450
 装飾品：ペルシアブーツ 物防：90 魔防：90 敏速：120
 ペルシアブーツ以外はオリジナル。

・備考

連撃重視の双剣と、一撃重視の両剣。この二種類の戦闘方法がある。
 両剣とはTOGのヒューバートが使っているような武器。双剣の柄

と柄を合わせたもの。

双剣と両剣のどちらかで戦うが、テイルズに出てくる技は前世の厨二病及び鍛錬により、ほとんど修得済み（剣技のみ）。

双剣と両剣とで、基本的には同じ技を使う。でも微妙に変わる技もある。

例：魔神剣・双牙（双剣）？剛・魔神剣（両剣）

もちろんオリジナルの技も練習している。特に秘奥義なんかはオリジナル。

精霊術はある人物によって、様々な術を覚えている。それが誰なのかは多大なるネタバレになるので、今の段階では記載できない。

上記の理由で精霊術は一応できるのだが、回復術以外はあまり使おうとしない。剣の方が、圧倒的に得意だから。というより精霊術は苦手。

やけにステータスが高いのは、ゲームなら終盤で手に入るランクの武器と防具と装飾品、そしてエクスフィアを装備しているから。それで納得してほしい。TOAの某大佐の初出並みにレベルが高いのはご愛嬌。

それと名称不明の剣だが、それはまたいずれ。進むにつれて明らかになる。

第四話 休息と出発

俺たちは依頼を成し終え、その旨を依頼主に報告した。

前に言った通り、報酬はちゃんと現金で支払われた。決して安い金ではない。少なくとも、これだけあれば宿に泊まるくらいは楽に支払える。

なので休もうと宿屋に向かった、その時だった。ミラが突然倒れたのだ。ジュードは慌てながら、しかし冷静にミラを診るという器用なことをしていた。

「熱はない……どんな感じ？」

「……力が入らない」

倒れながらもいつもの調子でそうは言う。そして言い終わったと同時に、腹が鳴る音が聞こえた。もちろんミラの腹から。

それを聞いたジュードが、ちゃんとご飯を食べているかを聞く。返って来た答えは、食べたことはないというものだ。俺が原作を知らなかったらとても驚いていただろうな。

ミラは、今までは食事ではなく、精霊の力で栄養を取っていたらしい。なんとも羨ましい。被災しても餓死する心配がないということじゃないか。

「そうか、これが空腹というものか」

「突然ぶっ倒れたから驚いたぞ。まさか原因が空腹とはな」

俺はミラにそう言うが、仕方ない気もする。今まで必要なかったのだから、空腹感が分らないのかもしれない。

そして宿屋へ向かう途中、アルヴィンが大きな溜息を吐いた。

「はぁ……」

「随分と大きな溜息だね」

「おたくら、実はア・ジュールのスパイだったりしねえの？」

「な、そんなわけではないでしょ。ね、ゼニス？」

「ウ、ウン。ソウダネ、ソナワケガナイジャナイカ」

あ、ヤバ。片言になっちまった。怪しんで……

「軍が特法使って追うなんて、ア・ジュールの軍事スパイくらいだと思っただけだな」

……ないようだ。よかったよかった。

「誤解だよ！」

「何故それ程そこにこだわるのだ？ お前……まさかラ・シュガルの……」

ミラはそこに訝しむが、アルヴィンは首を横に振った。

「違うつて。ただ働きでも、おたくらがア・ジュールの関係者なら、軍にコネつけてもらってオイシイ仕事にありつけるかもって思ったんだよ」

……嘘だな。アルヴィン、ア・ジュールの軍のコネなら持つてるだろ。

「期待にそえなくてすまない。謝礼は必ず払う。だから、もうしばらく待って欲しい」

「わかったよ。そのかわり、待ち時間の料金も請求させてもらっわ」

今まで歩みを止めていたが、会話が終わったことでまた歩き出した。皆はさつきまでと何ら変わりなく歩いているが、俺は違った。心臓がバクバクである。いつかはバレるのを覚悟しているが、今はその時ではない。

そして宿屋に入り、アルヴィンが宿屋のおっちゃんに話しかける。

「いらつしやい」

「四人だ。とりあえず、すぐに食事だけでももらっていいかい？」

「すまないね。料理人がまだ来てないんだよ。……おいおい」

おっちゃんが驚いた目で俺の後ろを見たので、俺も後ろに目を向ける。すると、ミラが今にも倒れそうになっていた。それを見たジュードが溜息を吐く。

「だったら、厨房を使わせてもらってもいいですか？」

「お連れさん、ぶっ倒れそうだしな。好きにしてもらっていいよ」

ぶっ倒れそうっていうか、すでにぶっ倒れたけどね。ミラ嬢。それにしても何ていい人なんだ、このおっちゃん。俺らがいくら客とはいえ、見も知らぬ人のために自分の宿の厨房を貸せるとは。

「あ、ジュード。俺も手伝うぞ」

厨房に向かったジュードを追いかけて、料理の手伝いをする。料理人は来ていないとのことだったが、食材はかなりあったので作るのに困らなかった。

作り終わり、テーブルに座って待っているミラとアルヴィンのところへ行き、四人分の料理を置いて食べ始めた。

「いただきます、っと」

手と手を合わせてからの、この言葉。

相変わらず日本の習慣が残っている俺は、今でもこれを行う癖がある。以前ジュードに指摘されるまで気付かなかった。

やはりというかなんというか、それを知っているジュード以外の二人は首を傾げていた。

「む？ その”いただきます”とやらは、どういう意味だ？」

「あゝ、気にすんな。何かを食べる前に俺が言う癖だから」

「それ、前に僕が聞いた時も言ったよね？ どういう意味なのか教えてよ」

「そこまで気にすることか？ まあいいけどさ。今の言葉は色々な意味があるんだが……簡単に言えば食材に対して、”あなたの命をいただいて、私は今日も生きていきます”という感謝の意をあらわしているんだ。食材にも命があるという考えがなければ意味が分からないだろうが、肉だって元々は命ある生物だった。その命をもらいますという意味の表れだな」

説明が長くなってしまったが、実際にもこんな所だろう。間違っただけではないはずだ。

「なるほど……それは確かにそうだ。ゼニスと一緒にいると、色々なことを知ることができるな。勉強になる」

俺のいた世界とこの世界はかなり違うからな。元々は宗教とかでこの言葉がつくられた訳だし。

「ふむ、それでは私も言うでしょう。いただきます」

「……いただきます」

ミラが俺の真似をして、ジュードとアルヴィンが続く。そしてミラが、誰よりも早く食いついた。

「お、美味い」

「それだ」

アルヴィンが俺とジュードの料理を称賛すると、ミラが顔を上げた。今までずっとがっついていたのに。

「食事というのは、なかなか楽しい。人は、もっとこういうものを大切にすればいいのだ。先ほどのゼニスの言葉も同じだ」

微笑を浮かべてそう言うミラは、慈愛に満ちていた。原作でも言うていたが、本当に人間が好きなのだろう。

しばらくすると、いつの間にかミラは寝てしまっていた。食い終わってるところが笑える。

「もしかして寝るのも初めてなのかな」

「……さっきの飯食べてなかったってのもそうだが……何者？ この娘」

「マクスウェルなんだって。アルヴィン、知ってる？」

「……マクスウェルだって？」

驚きながら、しかし静かにアルヴィンが言う。

「俺も聞いた。自分でマクスウェルだとか言っていたし、ジュードの話聞けば、四大精霊を使役していたらしいからな」

「精霊の主、四元素の使い手、最古の精霊、色々な呼び名があるが……この娘が、精霊マクスウェル？ 嘘だろ……」

「そんなにすごい精霊なの？」

「ああ。信じられないよ。ガキの頃から枕元で、マクスウェルの話を聞いて育ったんだからな」

「そんなミラが壊そうとしている物って、何なんだろう……？」

「壊そうとしている？ 何を？」

「あ、うん。確か黒匣^{ジン}とか言ってたかな。研究所にあった装置」

「……ふん」

「ミラにちゃんと聞いてみようかな……」

「はあ、ジュードはまた……。ちょっと注意はしておくか。」

「興味本位で首つつこんで、ア・ジュールでも追われないように気を付けるよ？」

「……」

「ゼニスの言う通りだが……しっかりと考えるんだな」

「うん、ありがとう。ゼニスにアルヴィン」

今夜の会話はここで終わり、俺たちはそれぞれ部屋へ向かった。眠っていたミラはどうやって部屋に行ったのかって？ 知らん。俺も知りたい。ジュードが運んだんじゃない？

そして次の日。

「おはよう、三人とも」

「おはよう。早速だがジュード、これからのことで話がある」

「うん……」

「私は二・アケリアへ帰ろうと思っている」

「二・アケリア？ ミアの住んでいるところ？」

「正確には祀られている。そこに帰れば、四大を再召喚できるかもしれない」

祀られているとは……さすがは精霊の主、と言った所か？

「マジでマクスウェルなのか……」

アルヴィンがそう呟いていた。

……ちょっと悪戯してやろうっと。

「彼女を……せば、エレンピオス………んだよね？」

「っ！？」

本当に悲しそうに、わざと聞こえないように独り言を呟く。だが少しは聞こえたようで、アルヴィンが俺の方を向いて目を見開いた。

「ん？ アルヴィン、どうかしたのか？」

「……いや、何でもねえ」

くっくっく。どうしたのかねえ、アルヴィン君は。

しかしこれよりも北上すると、俺……仕事サボってる状態だからあ

いつらに連れ戻される気がするんだが、どうしよう。いやでも会わなければ無問題だよな？

……っと、思考していたら話がすすんでいたらしい。ジュードはミラについていき、アルヴィンも一緒に行くそうだ。

「ゼニスはどうする？ 君は完全に巻き込んでしまったから、そこは君の判断にすべて任せるが？」

「……色々考えたがここはラ・シュガルに近い。兵士が来るのも時間の問題だ。だから一緒に行くさ」

「そうか、すまないな」

「俺は気にしてねえから、お前も気にすんな」

俺は手を振りながらそう言っ、宿から外に出た。ジュードはそれからミラに何か言ったようだが、外にいた俺にはもう聞こえなかった。

俺が外に出てから一分もせず、二人は出てきた。アルヴィンは海停の出口にいたので、俺はジュードたちより一足先にアルヴィンの所へ行った。

「……なあ、ゼニス」

「何だ？」

「……いや、やっぱり何でもねえ」

変なアルヴィンだな。でも何を言おうとしたのか、簡単に予想できる。

どうせ、ミラ＝マクスウェルに関係することだろう。もしくはエレンピオス関連。さっき俺が小声で言ったのを聞きとってたからな。

「……お、ジュードにミラ嬢」

「んじゃ、行くとしますか」

二人が来たのでそう言い、頷き合う。

「ミラ、確かここから北って言ってたよね？」

「どれくらいかかるんだ？」

「シルフの力で飛んだのなら、半日もかからない距離だろう」

「いやいやミラ嬢、それで分かるのは君だけで俺らには理解不能だ」
実際そうだろう。シルフを使役して空を飛ぶなど、普通はやらない。
というかできない。俺の言葉に、アルヴィンも肯定している。

「途中に休めるところが、あるといいんだが」

「地図だと村があるみたいだったし、大丈夫じゃないかな」

「いずれにせよ、ここにいても始まらない。行くしかないだろう」

「はいはい」

これによって、これからの方針……なのかは分からないが、北に行くということが決定した。本音を言えば北上したくないんだけど、しょうがないか。

俺たちは昨日と同じように、イラート間道を進んでいる。ただ昨日は間道の西方へ行ったが、今日は湖に用はない。なのでそのまま北へ向かった。蛇足になるが、俺は二・アケリアに行ったことはないが、近くを通ったことならある。だからあそこまでの道も、何となくが分かる。迷うことはないだろう。

間道には昨日と同じく魔物がいるが、俺にとっては何も問題ない。たまに精霊術を使うのもいるが、滅多な事では俺に当たらない……

「ゼニス危ない！」

ジュードの声が聞こえて横を向くと、噂をすればなんとやら、風の精霊術が俺に向かって飛んで来た。まあ焦ることはなく、ジャンプして避ける。そしてすかさずカウンター！

「鳳凰天駆！」

炎を纏い、まるで鳥のように空中から突撃する。それは先ほど俺に精霊術をぶつ放してきた魔物、ゴブリンに命中し、灰となった。次に、偶然ゴブリンの横にいたウルフに両剣で斬りかかる。

「虎牙烈斬！」

これは、虎牙破斬の威力を上げた技だ。見た目は大して変りないが、その威力は全然違う。ちなみに、双剣だと虎牙連斬になる。普通に虎牙破斬を使う時もあるけど、俺は基本的に派生技しか使わない。

「これで終了……っと。サンキュな、ジュード」

「ううん、大丈夫そうでよかったよ。それにしてもすごいね」

「ジュードもいずれ、これくらい強くなれるさ」

嘘ではない。事実、ジュードは戦闘の才能があるだろう。本人は護身術として習ったと言っているが、あれは既に護身の域を超えている。護身術で兵士を倒せるとは、兵士が可哀そうだ。仮にも訓練している身なのに、医者護身術に負けるとか。その事実を知ったらプライドがズタズタになるのではないだろうか？

まあ、ともかくこんなトラブルがあったものの、俺たちは順調に北へ進んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777x/>

エクシリア 転生者のいる世界

2011年11月15日07時07分発行